

市民大学「一柿塾」のご案内

2019. 4. 1
川村晃生

「一柿塾」が八年目を迎えました。「一柿塾」は、住井すゑさんがご自宅で「抱樸舎」という市民大学を開設されたことを、訪れた住井邸でご息女からお聞きしたことが、ヒントになったのかもしれない。私は約30年にわたり、市民運動に携わってきましたが、市民が様々な知識を得ながら自ら理論を構築していく力を養う場が必要であることを痛感してきました。そして大学の退職を機に、大学の講座を市民に開放できるような場をつくりたいと思ってきました。

多彩な内容を提供したいと考えておりますので、ご聴講いただければ幸いです。なお、塾名は農民が柿を収穫する際に、枝に一つ残して鳥の食餌に供するという、人間と他の生物との共生を体現した日本人の美しく優しい思想に基くものです。

講座内容は裏面の通りです。

○場所 「みどり・山梨」事務所（下記地図参照）

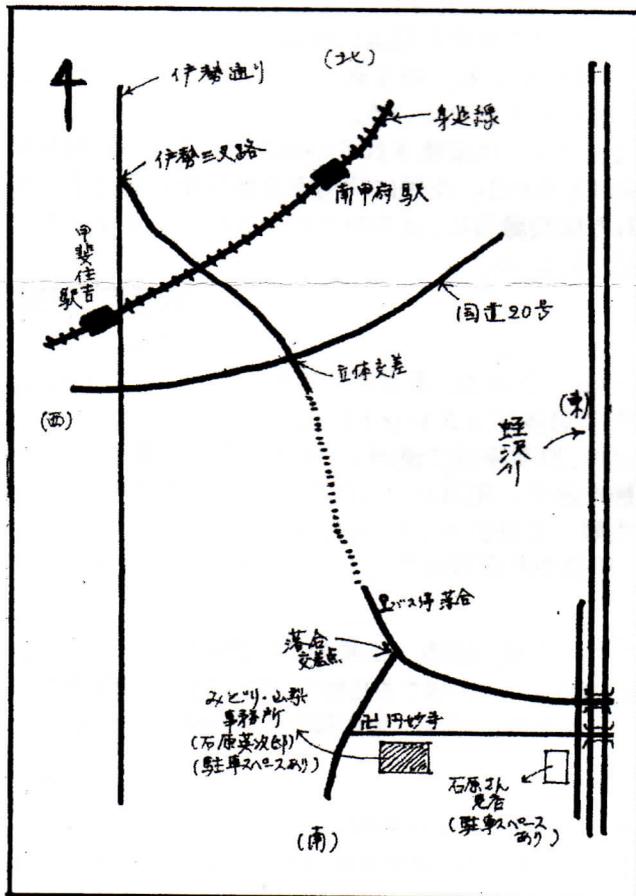
（甲府市小曲町1255-2、石原英次氏邸内）

※駐車スペースに限りがありますので、できるだけ乗り合わせてお越しください。（バスは御所循環及び豊富行の「落合」停留所が近いのですが、土日は欠便のため不便です。）

○参加費は会場運営費（光熱費等）として200円頂きます。（但し、各自の発意による支援カンパは有難く頂戴します。下記の口座をご利用ください。）

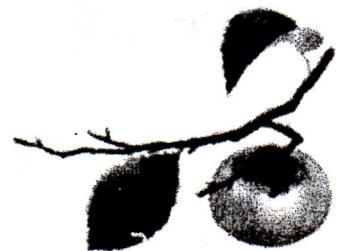
○湯茶の用意はありませんので、必要な方は各自ご持参ください。

○事前予約は不要ですが、定員30名程度を考えています。（40名まで入室可）

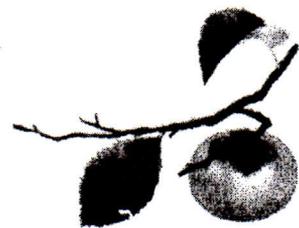


（連絡先）〒400-0014
甲府市古府中町984-2
(T/F)055-252-0288 川村晃生

郵便振替口座 00250-4-85431
口座名 「一柿塾」



2019年度 「一柿塾」スケジュール



日時	講師名 ／演題	①講師紹介／②講座内容
1 13:30～15:30 (12/14以外すべて同じ) 4月20日(土)	松村 高夫 「米国の原爆投下をめぐる責任」	<p>① 慶應義塾大学名誉教授。声楽家。イギリス社会史や労働史を専攻。その他に戦前の日本の植民地（朝鮮、満州）の社会史、労働史を研究。七三一部隊の細菌戦について調査し、家永教科書裁判や戦後補償裁判にも関わる。著書に『日本帝国主義下の植民地労働史』（不二出版）、『虐殺の社会史』（ミネルヴァ書房）など。</p> <p>② 「米国の原爆投下の責任を問う会」の活動を紹介しながら、原爆投下の責任問題の本質を明らかにする。日本は非道なアジア侵略を行ったがゆえに、アメリカの原爆投下の責任を追及し得なかったという面があり、それが戦後の核実験や核兵器の開発、ひいては原発の導入の歴史に繋がっている可能性を考える。</p>
2 (土) 6月15日	齋藤 貴男 「?（お楽しみ）」	<p>① ジャーナリスト。幅広い取材力と深い洞察力で、社会のさまざまな問題の本質を鋭く抉り出す。政治、経済、医療など、対象とする分野は実に多岐にわたっている。著書に『消費税のカラクリ』（講談社現代新書）、『戦争のできる国へ安倍政権の正体』（朝日新書）ほか。</p> <p>② 講座内容は、「6月時点で皆さんに最もお話ししたいこと」をお願いしています。</p>
3 9月7日(土)	安川 寿之輔 「福沢諭吉と日本の近代化」	<p>① 名古屋大学名誉教授。近代日本社会（教育）思想史専攻。不戦兵士。市民の会理事。『さようなら！福沢諭吉』発行世話人。『福沢諭吉全集』を精読することにより、一貫して近代化における福沢諭吉の位置づけの修正を主張。『福沢諭吉のアジア認識』（高文研）、『福沢諭吉と丸山真男』（同）など。</p> <p>② 「天は人の上に人をつくらず人の下に人をつくらず（といへり）」を以って知られる福沢諭吉が、実はアジアや女性への強烈な差別主義者であり、また好戦論者でもあったことを立証する。あわせて福沢を神話化した丸山真男の言説にも論及し、福沢諭吉を日本の近代化にどう位置づけるべきかを新たに提示する。</p>
4 10月19日(土)	大河原 雅子 「市民の政治—いま求められつつあるもの」	<p>① 衆議院議員（立憲民主党）。東京都に食品安全条例の制定を求める運動に参加。以後環境問題などの活動に関わり、1993年東京都議会議員（生活ネットワーク）。2007年参議院議員（民主党）。9条改正反対、脱原発、アベノミクス否認などの主張を掲げ、市民運動とも繋がる活動を続けている。</p> <p>② わが国の政治に、市民の意思はどのように反映されているのか。もしNoだとすれば、そこにはどのような理由があるのか。市民に政治家を作り出し育て上げる力は？市民勢力の中から生まれた国会議員に、日本の市民の政治のありようを話していただく。</p>
5 12月14日(土)	秋山 豊寛 「農民の原発事故体験」	<p>① 元TBS記者（ワシントン支局長）。日本人初の宇宙飛行士。1995年退社。同年、福島県に移住。「原木椎茸」生産販売農家になる。無農薬・有機栽培を志す百姓集団「あぶくま農業者大学校」を結成。著書に『若者たちと農とデモ暮らし』（岩波書店）、『原発難民日記』（岩波ブックレット）ほか。</p> <p>② 福島県で農業を営んでいるさ中、原発事故に遭遇し、京都を経て三重県に避難。宇宙飛行士という特別な体験を経て、報道という仕事から農業に転身したが、それにはどんな世界観や人生観の背景があったのか。そして、そうした人生を過ごしてきた人間にとって、原発や原発事故はどのように映ったのかを自在に語っていただく。</p>
6 2月15日(土)	川村 晃生 「壊される景観—松原の変遷」	<p>① 慶應義塾大学名誉教授。「みどり・山梨」顧問。日本文学の研究から、人文学を現代社会に反映する方法論を模索、環境人文学の確立を目指す。著書に『日本文学から「自然」を読む』（勉誠出版）、『壊れゆく景観』（共著・慶應義塾大学出版会）ほか。</p> <p>② 松原はわが国の古い、そして美しい景観として日本人に愛されてきた。とくに海辺の松原は、唱歌によっても親しまれ、日本独特の風景を形づくってきた。いったい日本の海岸線にはなぜ松原が生成し、なぜ保たれてきたのだろうか。そしていまは？</p>